



Q135. バイステックの7原則①は？



A. 個別化の原則、ですね。

対人援助の仕事にはいろいろな職種があり、いろいろな分野があります。

直接アプローチする援助職と、間接的にアプローチする援助職があり、人と関わっているという点ではどちらも同じです。

人と関わる援助者の行動規範として有名なものに「バイステックの7原則」があり、今回はその1つめ「個別化の原則」です。

私たちが私たちが関わらせてもらう子どもは、その一人一人が世界で唯一の存在である、という認識のもと、個別に対応していくということですね。

どうしても「言葉がない」「じっとできない」「集中できない」といったカテゴリーに分けて一括りにしてしまいがち。

似たような困りごとがあると、まとめてしまい同じような対応をしてしまいたくなるのですね。

表面的には同じ悩みに見えても、子どもひとり一人が抱えている悩みや困りごとの原因はそれぞれだし、年齢も状況も、置かれている環境も違ってきます。

似たようなケースであったとしても、何もかもが違うものなので、全く同じということはありません。

ケースの検討会で気を付けなければいけない点はここにあるの。

Aくんはなにかの拍子に、人の腕や背中をパシッと叩いてしまいます。

叩いている前後のことを記録してモニタリングしてみると、どうやら気持ちが伝えきれないときに行動に出てしまっている。

言いたいことが言えないときに、問題のある行動として出てきているのですね。

Bさんもなにかの拍子に、人の腕や背中を叩いてしまいます。

モニタリングしてみると、興奮してしまうと行動になって表れています。

嬉しすぎたり、腹が立ちすぎたりして気持ちがコントロールできなくなると行動となって出てしまうのですね。

どちらも「叩く」という同じ行動をしていますが、原因になっていることは違います。

これを「叩く」という動作が同じだから、みんな言いたいことが言えていないのだ、とか、クールダウンしてもらえば大丈夫、ということにはなりませんよね。

ひとり一人が困りとしている原因を解決しなければ、的の外れた支援ということになります。

かなり身近な「問題のある行動」という例を挙げましたが、この考え方を広く応用していきます。

支援を受ける人が抱える様々な問題や課題はそれぞれ別で、置かれている家庭環境も違う。

同じように見えるケースでも、全く同じ状況であることはない、と言えるようです。

外から見ると同じようなケースでも、子どもや保護者ひとり一人の人格を尊重しながら対応することで、1対1の関係を構築していくことが大切になります。

目の前にいる人は、世界に一人だけの君である、ということを考えなければいけません。

グループに分けたり、レッテルを張って支援をパターン化させることはダメ、ということです。

子どもや保護者とより良い関係性を構築するためには、先入観や偏見にとらわれていないか、を自己点検することをお勧めします。

スタッフは、子どもや保護者が「気持ちや関心を向けてくれているな」と感じてくれているかどうか、を考えるべき。

自分のペースで話をしてばかりいると「忙しいの？」と言われてしまいますよ。

経験を積んでいけばいくほど様々なパターンに遭遇して経験値が上がっていきます。

ケースに関われば関わるほど、よく似たことがあったな、という思いも増えてしまいます。

皮肉なことですが、多くのケースに関わってきた人ほど、個別化ではなくてパターン化しやすい傾向があるようです。

バイスティックはその著書の中で個別化について「個人としてとらえられることは、クライアントの権利でありニーズである」と記しています。

「先入観にとらわれていないか」

「子どもや保護者をパターン化してカテゴリに分けていないか」

「解決法や支援がパターン化した流れ作業になっていないか」

これらを個人としても事業所としても、自己点検していく必要があります。

[《MENU》](#)

[《対人援助職というのは？》](#)

[《②意図された感情表現の原則、というのは？》](#)

放課後等デイサービス支援事業
Support Project of
Day-service for After-school
At Kyoto

2023-06-05 掲載